

正体性を明らかにする過程で

朴 慶

私は在日朝鮮人の父と日本人の母を持ついわゆるダブルである。父は在日朝鮮人四世であるため、私は在日朝鮮人五世となる。私が在日朝鮮人と知った時は小学校五年生に遡る。当時は父からふとしたきっかけで、お前は「在日韓国人だぞ」といわれた記憶がある。それを聞いたときは特に何とも思わなかった。それはいたって自然なことで、自分が在日朝鮮人と聞く前から、正月には朝鮮料理が出ていたり、朝鮮語が少し使われたりと日本とは何か違うということを感じていたからだ。そしてそれ以上に「日本学校」にしかなっていない私の中には朝鮮民族というアイデンティティは存在せず、葛藤することはなかったからだ。そうして高校を卒業するまで自身の在日朝鮮人という半身は身を潜めることになる。

その後、大学へ入学してすぐに在日朝鮮人学生団体と出会った。私の大学は多文化共生の講義もいくつかあり、その一つを取っていた講義のゲストとしてその団体の人がやってきたのだ。私は大学での一番の目的ではないにしろ在日朝鮮人について学びたいと思っていたし、何より自分を理解したいと思っていた。そんな矢先にその団体と出会った。

はじめに経験したのは民族名であった。私は民族名をもっていなかったが、漢字をハングルで読んだ名前と呼ばれることになった。生れて初めての民族名であったが、それは通過儀礼のようなもので民族名で呼ばれても自分のことではない気がしていた。そして多くの在日朝鮮人と出会ったが、「朝鮮人」として私を見る視線がささった。自身の中には「朝鮮人性」はなかったためそれらの視点は、むしろ私の日本人性を浮き彫りにした。団体に入り、多様な朝鮮人と接しているときほど自分が朝鮮人である一方で、日本人であることを実感した。「ウリマル」を学び、歴史を学ぶことで形式的に朝鮮人であることを理解したが、日本の学校を出て、日本人として生きてきたという自己理解だけが進んでいた。そして在日朝鮮人であるが日本人である、そんな矛盾が自分の中の葛藤として活動の際ずっと付きまとうことになる。

その葛藤の一つが、朝鮮人である自分を自覚してきた頃、朝鮮高校無償化除外の敗訴の総括集会に出席した時だ。そのとき流れたビデオには自分をその団体に迎え入れてくれた人たちが映っていた。当時、高校生ながら、将来のことを話したり、運動に参加する姿があった。私はそれを見て「同じ朝鮮人」の友人として接せられるのかと思った。私に向けられていた「朝鮮人」を見る視点はいつしか自分が他人に向けていたのではないか。「同じ朝鮮人」として接している隣の友人は国籍が異なることにより、在留カードを更新しなければならない。日本国籍である自分は気にもしない行動である。朝鮮高校が無償化から除外されていた時、私はなにを考えていただろう。

その団体では朝鮮学校出身者が多く、ウリマルが話せたり、すでに朝鮮人の中に知り合いがいたりして、日本学校出身者はマイノリティであった。そうした中で自己理解はマイノリティの中のマイノリティというものになっていたのではないか。私は知らないうちに弱者としての自分を許容していたのではないか。私が日本学校を出て、在日朝鮮人と日本人のダブルであるということは変わらない。それは朝鮮人でありながら、マジョリティ側に所属していたり、朝鮮人に対して無自覚であったという加害者性を伴ったものである。自身の正体性を明らかにすることは自身の加害者性を浮き彫りにしていく作業であると思う。しかし 現在は、被抑圧者の活動は見られても、加害者が自信を省みる活動が少ない気がする。それは被害者になるという危機感があっても、加害者になるという危機感が不足しているからだろう。私は自身の正体性を明らかにしていく過程の中で、加害者性について冷徹に見つめられる人間になりたい。